
遊戯王GX ～界の繋ぐ竜王～

ハル マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX ～界の繋ぐ竜王～

【Nコード】

N8660V

【作者名】

ハル マキ

【あらすじ】

俺の名は久我竜太郎^{くが りゅうたろう}。何故か神様の孫の尻拭いの為に転生させられるらしい。理由はともあれ、それ以外は好きにしたいと言われたから平穩無事に生活してやるぜ！！で、場所は？へ…、『遊戯王GX』！？

プロローグ〈転生前〉（前書き）

同サイトで掲載中の『リリカルうー、マジカルうー、ロボットルうー、
ファイトおー！！！』が行き詰ってしまったので、気分転換も兼
ねて投稿しました。此方も亀更新になると思われますが、読んでや
ってください。

プロローグ〈転生前〉

プロローグ

side:???

気づけば周りが見渡す限り真っ黒だった。上下左右前後と際限なく真っ黒ですよ。てか、此処何処？

「おお、よおやつと気が付いたみたいじゃのお。」

ん？こんな所に誰かいるのか？まあ、ある意味助かったな。此処が何処だか知りたいところだったしね。とりあえず、後ろから声がしたから振り返って話を聞いてみますか。

「すみません。此処が何処か教えてもらえませんか。」

そお言つて振り返つた俺の先に居たのは……。

「なに、こつちも勝手に呼んだからのお。それ位は答えるぞ。」

デフォルメしたパンダ？みたいなのがいた。……てか、どう見てもパンダネコですね。本当にありがとうございます。まあ、とりあえず。

「あ、なかなかよく出来た着ぐるみですね。ここってどこかの舞台裏ですか？」

「いやいや、着ぐるみじゃないぞ。おぬしの頭にある情報で、一番イメージしやすいのを選択したらこうなっただけじゃ。」

いやいや、頭の中？イメージ？何言ってるの？まるで俺の考えている事が分かる言い方じゃないか。まあ、パンダネコはかわいいから好きだけど。

「うむ、考えている事も丸分かりじゃ。しかし、男のくせにこんなもんが好きなのか？」

ほっとけ！！あれ、俺さつき声に出して言ってたっけ？

「だから、わしがおぬしの心を読んでそれに答えたんじゃないよ。」

「んなあ？！・・・あんた、いったい何者だ。」

「うむ、おぬし等の世界では神という事になっておるのお。」

「神・・・。」

「そう、神じゃ。」

おいおい、マジですか！？なんで神様？！・・・いや、落ち着け、落ち着くんた。取りあえず深呼吸をしてから、素数を数えればいいんだよな。

ヒツヒフウー、ヒツヒ「その呼吸方法は妊婦さんがするもんじゃ、おぬしがやっても意味無いぞ？というか、ちと落ち着け。まずは大きく息を吸うんじゃ。」

お、おお、そうだった。スウー「息吐いてえー」ハアー「吸ってー」スウー「吸ってー」スウー「息止め
てえー」ピタ。・・・ブツブツ！?!?

「げっほ、ごおっほ……。何すんじゃ！！」

「混乱を解く場合はこっちのほうが手っ取り早いからのお。」

「だからって、息止めさせる事無いだろうが！！！」

「じゃが、緊張は解けたじゃろ？」

「……っち。確かに解けたよ。釈然としないですけどね。」

「すまんすまん、久しぶりに孫以外の若いのと話したからのお。ついつい、からかってしまった。」

「あゝ……。取りあえず、もう深く考えるのやめます。」

「ん？そうか？まあ、それならそろそろ本題に移るとすかのお。」

「本題？」

「そうじゃ。実はおぬしに頼みたい事があってのお。その為におぬしを此処に連れて来たんじゃ。」

「連れて来たって……。そういえばさっきも聞いたけど此処って何処なんだ？」

「ここは現世うつしよとあの世の狭間じゃな。死者はまずここを通過してあの世に行く。」

「あの世って……。ちょっと待て、まさか俺って死んでるのか！？」

ウソだろ・・・！！死んだ時の記憶なんてねえぞ！？いつたい何時？！

「うむ、困っている時にちょうど死んだお前さんを見つけてのお。ここに留めたわけじゃ。」

「なんで死んだの！？」

「お前さんが住んどったアパートが火事になってのお。おぬしが寝ている間に体は燃えて殆どが焼けカス状態なんじゃ。まあ、シヨックじゃろうが、こっちも厄介なことが起こっておるからのお。話を進めるぞ。」

「・・・ああ。」

「うむ、実はおぬしに別世界に行つてある物を管理してもらいたいんじゃ。むろん、タダとは言わん。」

「じゃあ、俺を生き返らしてください！！」

「無理じゃ。」

「なんで！！」

「おぬしの体が無事ならそれでもよかつたんじゃがお。魂を戻す器かひたがあれば不可能じゃ。」

「そ、そんなあ・・・。」

「まあ、行ってもらいたい世界に転生させてやるからそれで手を打たんか？管理さえしてもらえれば他の事は好きにしてもらって構わんしのお。」

どう足掻いても生き返るのは無理なわけか……なら。

「……じゃあ、おれの家族がみんな不自由なく、幸せに暮らせるようにしてください。そうすれば受けます。」

「家族というと、おぬしが育った孤児院の人達の事か？」

そう、実は俺は孤児院育ちで血の繋がった家族は一人もいない。でも、そんなのどうでもいい。俺の事を此処まで育ててくれたのは間違いなく孤児院の人達だ。だからせめてもの恩返しだ。それに最近経営なんて何時潰れてもおかしくない状態のようだしな。なら、孤児院の人達や、子供たちが不自由しないようしなければ。

「なるほどのお。……うむ、わかた。その願い確かに聞き届けた。必ず叶えよう。」

「ありがとうございます。」

よかった……。どうやらこの願いは叶えてもらえるようだ。これで心残りはなくなった。

さて、次は転生のほうだな。

「……ところで、なんで俺にこんな事を頼むんですか？神様なら何とか出来そうな気がするんですけど。」

「む、確かに儂なら何とかできるが、それをすると孫がお……

」。

「孫？」

「うむ、じつは行ってもらいたい世界は僕の孫が初めて管理する世界なんじゃ。じゃが何分初めてな事もあつて、その世界にまた別の世界のモノを落としてしまつてのお。しかもここで僕が手を貸すと上にはれてしまふ。そしたら孫がその世界を管理することが出来なくなつてしまふのじゃ。だから、その落しモノをおぬしに管理してもらいたいのじゃ。」

よおは、孫の失敗の尻拭いといったところか。でも結局俺をその世界に転生させたら同じなんじゃない？

「なあに、ばれない範囲なら問題ないわい。それに僕は神様の中では結構上のほうじゃからのお。最悪の場合はもみ消す事も出来る。」

8

「もみ消せるんだつたら、そうすればいいじゃないですか？」

「そうすると世界に多大な影響が出てしまふんじゃ。それを避けるためにおぬしに頼んどるんじゃ。わかつたかのお？」

「まあ、一応わかりました。で、俺は向こうで何を管理すればいいんですか？」

「それについては向こうで孫が説明するそうじゃ。さて、そろそろおぬしを向こうに送りたいのお。他に聞きたい事はあるかのお？」

「俺が行くところってどんな所なんですか？あんまり危険なのは嫌なんですけど……。」

「む、そういえば言ってなかったのお。おぬしの行く世界は『遊戯王』の世界じゃ。」

「へ・・・、遊戯王!?!」

「自分から首さえ突っ込まなければ大丈夫じゃろ。もし何かあっても、色々特典付けるから問題ないじゃろ。」

いや、まあ、そうかもしれないですけど・・・。

「それじゃあ、そろそろ道を開くからのお、行ってきてくれ。」

「いや、まだ心の準備が・・・。」

「覚悟を決めろ、男じゃろ。では、行ってらっしゃい。」

“パカ”

「パカって、落とし穴かよおおおおお・・・!!!!」

????:end

プロローグ〜誕生前〜

side:???

落とし穴に落とされたと思ったら真つ暗なところだった。・・・またか。

“お、おまえさんがじいちゃんに送られた奴かい？”

どうしたもんかと考えていると頭に声が響いてきた。パンダネコの神様で態勢付いたからなのか、驚きはあんまり無いな。

「そのおじいさんが神様ならおそらく。あなたが厄介なモノを落としたお孫さんで？」

“ああ、そうさ。いや、今回はあたしの失敗の為に来てもらっちゃって……。ホントに申し訳ないね。”

「いえいえ、俺も第二の人生が送れますんで、ギブ・アンド・テイクってやつっすよ。」

“そう言ってもらうと助かるよ。・・・さて、雑談はこの位にして本題に入るうかね。おまえさんじいちゃんからどれ位説明されてるんだい？”

「そうですね、あなたが管理する世界に厄介なモノを落としたから管理して来いとか言われてないっすね。こっちに着いたらあなたから説明があるって聞いてましたし。」

“なるほど、漠然としか説明されていない訳か……。自分がミスしたとはいえ、もう少しばかり詳しく説明してくれてもいいと思うんだけどねえ。”

「まあ、自分の失敗は自分の力で何とかしろってことじゃないんですか？それでも、最低限のフォローを入れてくれるあたり良いおじいさんじゃないですか。」

“それもそうだね。そんじゃ、そろそろ説明させてもらおうよ。まずおまえさんにしてもらう事は例のものを管理してもらおう事とね。放置してたら世界に影響が出ちゃうしね。”

「すみません、そんなもん俺に管理できるんですか？」

“なに、管理といってもそれを無くさずに持っている事と、それを定期的に使用する位なんだよ。”

「管理の為に持っているというのは分かるんですけど、使うんですか？普通は使わないで封印とかしておくものだと思うんですけど？」

“ずっと封印できれば苦労は無いんだよ、それに定期的に使っちゃらないと何するかわかったもんじゃない……。”

「いったい俺に何を持たせる気なんですか……(汗)」

“『遊戯王』の世界なんだからカードに決まってるだろ。まあ、カードもあたしが作ったものなんだけどね……。”

「なんでそんな世界に影響出すようなもん作ってんの?!」

“いや、初めて世界を一人だけで管理できるって思ってたさあ、嬉しくってつい作っちゃった（・く）テヘペロ”

「軽っ！てか、あんた反省してるんか!？」

“反省はしている。だが後悔はしていない!”

「一番しちゃいけない答え返したよこの神ひと!!」

“いや、ね、本当は作っただけで世界には入れる気はなかったんだよ!!でも気づいたら勝手に入っていったんだよ!!ホントだよ!ウソじゃないんだよ!!”

「何ですかそれ・・・、まるで自分でその世界に行つたみたいじゃないですか。」

“いや、実際そのとおりなんだよ。なにせそのカードは精霊が宿らせているからね。”

「は？ちよつと待て、ただでさえ厄介なのに意志まであるのかよ!勘弁してくれよお。」

“あ、まあ、過ぎた事は仕方がない。前を向いていこうじゃないの!”

「こつちも願いを叶えて貰っている手前とやかく言う気はありませんがね、あんたはもう少し後ろを振り返るべきだ。」

“手厳しいね。まあ、事実だからしょうがないけどね。”

「まったく・・・で、俺はそのカードを所持と使用でいいんですね。後、そのカードってずっと肌身離さず持つてなきゃいけないんですか？流石に風呂とかまでに持つていくのはどうかと・・・？」

“ああ、そうだね、風呂とか入っている時とかは、専用のデッキケース付けるから、それにしまっておいて。でも、なるべく身近な所で所持しておくこと。そうすればお前さんとそのカードの繋がりが強まっていくからね。ある程度、繋がりが強まれば少しばかり離れていても問題無くなるから、それまでの辛抱だね。わかったかい？”

「わかりました。他に何か注意事項とかないですか？知らないで嫌な目に合うのは御免被りたいので。」

“そうだね、後はそのカードを他の人に使わせない事と、その世界から出さない事の二点だね。この二点は一番重要な事だから絶対阻止するんだよ。”

「何ですか？」

“まず前者なんだけどこいつは意志の弱いやつが使うとそいつの体に乗っ取るんだよ。”

「んなあ！そんなもん俺に持たせる気だったんですか！？」

“ああ、おまえさんは大丈夫だよあたしとおじいちゃんの加護や特典があるから影響もないよ。それにおまえさんはいわばそのカードの生きた封印みたいな役割なんだよ？おまえさん自身が乗っ取られていたらお話にもならないじゃないか。”

「いや、まあ、そうだけど……。一応聞くけどなんでそんな機能付けたんですか？迷惑以外の何ものでもないじゃないですか。」

“おまえさん、『カオシツクルーン』で漫画知ってるかい？”

「ん、ああ、あの作品ですね。あの作品は面白いですよ。でも月刊誌になってから立ち読み出来なくなって、単行本で読んでましたけど。それに途中で休載になっちゃったんですよ。」

“そうなんだよ、あたしも続きが気になって気になって仕方がないんだよ。作者はいつたいつになったら続きを書いてくれるんだろぅねえ〜。”

「ですよねえ〜。でもなんでその作品がここで出てくるんですか？」

“なあ、おまえさんはあの作品で一番好きなモンスターはなんだい……。”

「もちろん、死魔王！！つて、あんたまさか！？」

“そう、作ったカードは『デスレックス』シリーズ。竜界の王であり、あらゆるものを喰らう最凶最悪のモンスターだ！！”

「あ……。あんたつて神ヒミは……。ほんつつつとになんつうーもんをつくってんですかあああああ！！！！しかもシリーズつてことは……。」

“もちろん、頭、手足、体、翼、尻尾の5パーツのことね。やつちやつたZ E”

「よりによつて、あの食いしん坊怪獣共だなんて……。何考えて
んですか！？世界に影響与えるどころか下手したら滅びますよ！！
いや、ホント！マジで……！」

“いや、どつちもカード主体の作品だったからつい勢いで作つち
やてね。しかも、すごくいい出来になつちやてね、オリジナルと寸
分違わぬ力を秘めてるんだよ。”

「ちょ、マテ……！どうすんのそれ！？」

“はあーはっはっはっ……！どうしよつか？”

「うおいいいいいい……！！！」

“まあ、それを上手く管理するのがおまえさんの仕事さ。”

「むり！ムリ！！無理……！！闇竜王や水竜王なら話せば何とかなる
かもしれないけど、残りの三体をなんとかする自信なんてないです
よ！？？」

“だ、大丈夫だって。さっきも言ったけどあたしとおじいちゃん
の加護と特典があるから何とかなるって……！神様二人から加護を受け
られるんだからちょっとやさそつとじゃ最悪の事態にはならないつ
て……！”

「ホントですか……。」

“ホントホント。神様はウソは言わないから。”

「……信じましたよ。」

“後、他人の体に乗っ取る機能なんだけど、流石にその部分オリジナルと同じだと危険だと判断したから、ただ乗っ取るだけでカードを取り返せば乗っ取られた人は元の状態に戻るよ。”

「その判断は正しいですね。オリジナルだと存在そのものが乗っ取られてしまいますからね……。」

“ああ、そうだね……。さて、前者の問題はこんなもんかな？次は後者の世界から出さない事だね。”

「そういえばそれって、一体どういった事なんですか？イマイチ主旨がよくわからないんですが。」

“その点も今から説明するよ。世界から出さないってのは、地球から宇宙に出してはいけない。もう一つが『遊戯王』の世界から別の世界に出してはいけない。この二つの意味がある。”

「宇宙に出すとなにかあるんですか？後、別の世界に出すってのは人間界から精霊界に行くってことですか？」

“まず、宇宙に出すとその星の力の流れが急激に変化してしまうからだね。それに、おまえさんにカードを持たせておくのもそこが関係しているのよ。”

「どういう事ですか？」

“最初のほうにおまえさんがカードを持っている事で繋がり強くなつていって説明したね。まず、おまえさんとカードの繋がりを強めるのはお前さんにカードの力を少しづつ集中させる為なんだよ。”

そうする事で星に流れていたカードの力が少しづつ世界に流れなくなり、正常な力の流れに戻るといふ事なんだよ。力の流れの殆どがおまえさんにいつている状態ならともかく、まだ力の多くが地球に流れている状態で出て行ったら確実に世界規模の災害が起こるね。”

「理由は分かりましたけど、そんな世界に影響を与える力が俺に集中して、大丈夫なんですか？おもに俺が・・・。それに、さすがに俺も寿命とかで何時か死ぬと思うんですが、そういった場合はどうなるんですか？」

“その点なら問題ないよ。力は一定量貯まると白紙のカードの形になるように設定しておいた。そのカードにイメージを流し込めばおまえさんの新しい力になってくれるはずだよ。それとお前さんが死んだ場合だけど寿命での場合ならカードの繋がりが世界からあなたに完全に移っているはずだから一緒にこっちに回収する事が出来るはずだよ。後、寿命以外の死にはあかし達の加護があるから滅多な事がない限り死ねないよ。自殺しようとしても全部失敗するからね。それにもしすぐ死んでしまっても、そんな時はあたしが何とかするよ。元々あたしのミスな訳だしね。おまえさんは気にせずにあの世に行ってもらうよ。わかったかい？”

「なるほど、わかりました。じゃあ次をお願いします。」

“次に世界から出さない事。これは前者の理由もあるけど、それは別に問題があるんだよ。それと『遊戯王』の世界は人間界と精霊界合わせて一つの世界だから精霊界に行っても問題ないよ。あんたはあんたの世界から『遊戯王』の世界に来たから、何となく解るだろうが世界は無数にあるんだよ。で、その世界を管理しているのがあたら神だね。それで管理してる世界も一人一つじゃなくて、時空と宇宙を範囲で区切って管理しているんだよ。あたしが管理して

いる範囲内の世なら問題ないけど、滅多な事ではこんな事は起きないだろうが、もし別の神が管理している範囲世界に行ったら大問題が発生するんだよ！！！！”

「大問題ですか……。具体的にはどんな事が起こるんですか。」

“まず最初にあたしの管理する範囲世界全体に影響が出る。これはさつき説明した事よりも影響の規模も威力も桁違いに大きいから下手したらあなたのいる世界や幾つかの世界が消し飛ぶかもしれないね。次に別の神が管理する範囲世界に影響が出る。原因をすぐに回収すれば何とかなるけど、時間が経てば経つほど影響が大きくなつてあたしの世界みたいな影響が出る。そして最後、これが一番の問題だよ……。”

「今まで聞いてきた事も十分大問題ですけど。……一体どんな問題なんですか？」

“それは……。あたしの管理世界が取り上げられることだ！！！”

「……はあ。」

“ああ！何ため息なんてついてるんだい！！世界を一人で管理するというのは一人前の神と認められた証なんだよ！！ここまで来るのにどれだけ苦労したことが……。”

「じゃあ、何でそれを棒にするかもしれない事をしちゃったんですか？」

“それは、ようやく自分一人で世界を管理できるようになったのがうれしいのと、今までの苦労した分ハツチャケてしまった為に決ま

つてんでしょ、コンチキショウがあゝ（泣）！！”

「まんま、自業自得じゃないですか！！」

“と・に・か・く！！この問題を何とかしなければあたしに未来はない・・・。そのためにもおまえさんには頑張ってもらわないと困るんだよ。わかったかい？”

「今を聞いてすこぶる拒否したいですけど。此処で断つても後が怖いので、わかりました。」

“ よろしい。まあ、問題についての説明はこんなもんだね。他に聞きたい事はあるかい？”

「じゃあ、今さらなんですけど此処はどこですか？あなたのおじいさんがいた所とおなじところですか。」

“ん？ああ、チガウチガウ。ここは現世うつしよとあの世の狭間とは違う。ちゃんとした『遊戯王』の世界だよ。”

「それじゃあ、『遊戯王』の世界のいつたいどこなんですか？真つ暗な所から落とされたと思ったらまた真つ暗だったんで、少し気になつてたんですよ？」

“この世界でのおまえさんの新しい母親の胎はらのなかさ。真つ暗なのはおまえさんの体がまだ目が無いからだよ。”

「マジですか？じゃあ、俺は生まれるまでここで待ってなくちゃいけないんですか？」

“ ああ、大丈夫だよ。今は説明を聞くために意識がある状態なだけだから一度眠ってもらうよ。次におまえさんの意識が目覚めるのは五歳の時かね。リアル赤ちゃんごっこがしたいなら生まれた瞬間にしてみいいよ？”

「五歳のほうでお願いします!!」

“ はっはっはっ、了解したよ。それじゃあ最後におまえさんに持つてもらおうカードだが、当分の間はおまえさんの体の中に封印し、五歳の誕生日に記憶と一緒に出てくる様にしておいたよ。”

「なかなかの中二設定ですね……。俺の中の奴らが……。くっ、抑えきれない。みたいな。」

“ あっはっはっはっはっはっ!! 確かに中二病ポイね!! さて、それじゃあ、そろそろ一度お別れの時間だ。”

「あっ、はい。説明ありがとうございました。」

“ なに、自分のミス位ちゃんと説明しないとダメだからね。それに、おまえさんとの会話はなかなか面白かったしね。”

「俺も楽しかったです。色々と突っ込みどころが満載でしたけど。」

“ それは言わないお約束ってやつだよ。それじゃあ、また会おう。その時はあたしの名前を教えてやるよ。”

「じゃあ、俺も新しい名前で自己紹介させてもらいますよ。」

“ そいつは楽しみだ。それじゃ……。 ”

プロローグ〈誕生前〉（後書き）

主人公、さくせいちゅう転生中

第一話：ハッピーバースデー！！オレ！！

side:?????

ハッピーバースデー！！オレ！！

・・・皆さん、お久しぶりです。無事誕生日を迎えて五歳になりました。

いや、日本時間のAM00:00になった瞬間に記憶が戻ったけど、その瞬間がヤバかったな・・・。

いきなり大量の情報がどんどん頭の中を埋め尽くす感じがして、頭が痛い、気持ち悪いはで本当に最悪だったよ、まったく・・・。

“よう、誕生日おめでとう。おまえさんの意識が覚醒したみたいだから来たけど・・・、どうだい転生した感想は？”

「あ、お久しぶりです孫神さん。ありがとうございます。それと今は頭はスッキリしていますけど、最初のほうは最悪でしたよ。もうちょっとで吐くところでしたし、両親にばれないようにしたりとクタクタですよ。」

“あははは、それだけ言えば問題ないね。それといくらまだ名前を言っていないからって孫神ってのは安直すぎないかい？”

「分かりやすくもいいじゃないですか。それに使うのはどうせ今回だけなんですから。」

“それもそうだね。さて、それじゃあ約束道理に自己紹介といこうか。”

「そうですね。じゃあ俺からいきます。久我竜太郎くがりゅうたろうです。今後はこの名前でするしくお願いします。」

“わかった。あたしが名は繫女つなめ、新米の女神様さ。此方こそよろしく頼むよ。”

「はい。それで、今日はどうしてきたんですか？自己紹介は約束していたから目的の一つでしょうけど、それだけじゃないでしょ？」

“お、よく判ったね。今回こっちに来たのは竜太郎、おまえさんの中に封印していたカード達を取り出すために来たんだよ。最初は勝手に出る様にしようかと思ったんだけど、あのカードの事だから出た瞬間にどっかに飛んで行っちゃうんじゃないかと思ってね……用心の為に封印の重ねがけをしておいたんだよ。”

「おお、そんなとこまで考えてるんですね。それだけ頭が回るんだからなんであんあ失敗しちゃったんですかね？うっかり属性が何かついてるんですかね？」

“相変わらずの辛口だね……。まあお〜いいだろ過ぎた事なんだからさあ〜。”

「はっはっはっはっ、何言ってるんですか？俺はこれからこのネタであなたをからかったりしますよ。」

“おまえさん以外に性格悪いね！まあ、弱みがあるのは確かだ……。でもね、おまえさんだけが弱みを握っているとは限らないんだよ”

「！！さあ喰らいな、おまえさんの弱みを！！2か月前に幼稚園の同じバラ組の女の子に告白して見事に撃沈したたる！！」

「ぎいやあああああ！！何で知ってんの！？誰にも話していないの！！」

“ はっはっはっはっ！！仮にもあたしは神だよ。おまえさんが今まで何をしていたのか調べる位は簡単なことさ！！”

「くう・・・、腐つても神という事か。分かりました、今後は失敗ネタでからかう事はやめるんでそっちもやめてください。お願いします。いや、ホント、マジで。」

“ ふっふん！分かれば良いのだよ、分かれば。さて、そんじゃあそろそろ取り出すとしますか。”

「あ、はい、お願いします。」

“ 封印されし戦札達よ、今ここに蘇り新たなる主との絆を繋げ・・・解！！”

繋女さんが封印を解いた瞬間に、胸が熱くなり光りだした。いやあ、家族がみんな出かけてって助かった・・・。

こんなの見つかったら大慌てされそうだし。そして光っている胸から一つのデッキケースが出てきた。

“ さて、竜太郎よ、そのケースを手に取り契約の言葉を・・・。そうすれば封印が解けておまえさんとカードが繋がりができる筈だよ。”

「え、でも俺は契約の言葉なんて知らないよ？」

“なあに、心に浮かんだ言葉をそのまま口にすれば大丈夫だよ。”

「……。我が身より解かれし者達よ、汝らが撒く歪みを集める為、我を守護せよ！！」

そういつた瞬間に死竜王《デスⅡレックス》、剛竜王《デスⅡレックスⅡアームズ》、巨竜王《デスⅡレックスⅡボディ》、闇竜王《デスⅡレックスⅡウイング》、水竜王《デスⅡレックスⅡテール》の五体が俺を囲むように現れた。

そして俺の目の前にいた死竜王が、

『ぶるうあああああああ！！！！』

大音量の若本ボイスで叫んだ……。

「つて、なんで若本おおおおおおお！！」

『その小僧、貴様のねがい、たあくしかに聞き届けたあ。われらが願いを叶えるというのならばあ、汝をわれらの主と認め力を貸そう。それとわれは決して若本ではぬあゝい。』

「あ、はい、すいません。……で、その願いとは？」

『うむ、そおれは……、おまえのママアソンのパンティーだあ！

！！』

「……なんだって？」

『どうあから、おまえのママのパン』黙りなさい(ニツコリ)『い
ぎゃああああ!!--!』』

あ…、ありのまま、今起こった事を話すぜ!

死竜王が意味不明な事をもう一度言っている最中に串刺しになりや
がった!!

な…、何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何が起こったの
かわからなかった…。

頭がどうにかなりそうだった。催眠術だとか超スピードだとかそん
なチャチなもんじゃあ 断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を
味わったぜ…。

『…申し訳ありません、久我 竜太郎様。死竜王はどうやら疲
れているようなので、ここからはこの闇竜王 デス=レックス=ウ
ィングが御説明させて頂きます。よろしいですね?』

「ハイっ!ヨロシクお願いします!!--!」

『ありがとうございます。それでは、少々お待ちください。此方の
死竜王を片付けてきますので。』

そついうと闇竜王は死竜王を連れて自分が作った影の中に沈んでい
った…。

(ちよつとおおお!!なんなのあれは、俺の知っている死竜王と
は全然違うんですけど!?!いったいど

うなってるのよ繫女さん!!)

(“ いやあく、オリジナルと同じ性格にすると手を焼きそうだったから違う性格にしたんだけどね、普通じゃつまんないと思ってたらいつの間にかあんな風になっちゃったんだよ。やっちゃったZE。”)

(まあた、あんたはよけいなことをおおおお!!)

(“ しょうがないじゃないか！やりだしたら止まらなかったんだから!!!”)

『 あの、竜太郎様? 』

「 ハイイ!!! 」

『 どうかನさいましたか？顔も青いですし、説明のほうは明日にでもいたしましょうか? 』

「 いや、大丈夫です。ちょっと繫女さんと話してただけだから。問題ないです。 」

『 造物主様とですか？今こちらにいらしてるのですね。いったい何処に? 』

「 あ、いや、頭に直接話しかけてくるので、どこら辺にいるかまでは、その、ちよつと……。 」

“ すまないね、あたしはまだそっちの世界用の体をまだ用意してないんだよ。だから今は声だけね。 ”

『あらあら、造物主様ではございませんか。ご無沙汰しております。』

“ああ、久しぶりだね。・・・すまないね、おまえさん達には苦勞をかけちゃって。”

『いえ、あれをそのまま放置するのはあまりにも危険でしたので。・・・二重の意味で。』

“まったくもって、そのとおりだよ・・・。”

“『はあ・・・。』”

「あの〜、話が見えないですけど。」

『まあ、繋女様や闇の姐さんも色々あんだよ。おもにあの死^{バカ}竜王の事だね。ああ、そうだ自己紹介がまだだったね。俺は剛竜王 デスⅡレックスⅡアームズだ。よろしく!!』

『巨竜王 デスⅡレックスⅡボディ。・・・よろしく。』

『我は水竜王 デスⅡレックスⅡテール。よろしく頼む。』

「ああ、そういえばみんな俺の名前知ってるみたいだけど一応はね。俺は久我 竜太郎だ。」

『竜太郎様、お待たせして申し訳ありませんでした。・・・少しばかり、頭痛がしたので。』

「あ、ああ、大丈夫だよ。こつちもみんなと自己紹介をしていたからね。閻魔王にもしておかないと」

ね。俺の名前は久我 竜太郎。よろしくね。」

『はっ、よろしくお願い致します。竜太郎様。それでは、先ほどの説明の続きをさせて頂きますが、よろしいでしょうか?』

「うん、それじゃあお願い。」

『では、先ほど言った我々の願いなのですが、それは我々のエネルギー摂取の為にデュエルをして頂く事です。』

「え、デュエル?」

『はい、すでに造物主様からご説明があつたと思われませんが、我々は存在するだけで世界に影響を与えてしまいます。それはつまり、我々から出るエネルギーが原因なのです。』

『まあ、人間でいえば何もしていないのカロリーを消費して腹が減つていくのと同じ原理だな。』

「な、なるほど。でも、そのエネルギー問題とデュエルとどうつながるんだ?」

『基本的に我等はどのようなモノでも己のエネルギーへと変えることが出来る。しかし、何でもかんでも喰らっていたら、周りにも異変が起こる。』

『物、食べる、無くなる。電気、火、食べる、電気代、ガス代かかる。』

「なるほどね。でも何でデュエル？」

『一番手っ取り早いのが人間から出る生命エネルギーなんだが。だが、それだと吸われた奴が倒れちまう。直接吸おうものなら死んでもおかしくないな。』

『そこで、デュエルによって発生されるデュエルエネルギーです。これは言わば、人と人との意思と力のぶつかり合いで発生する生命エネルギーの一つです。人の意志とは時に強大な力となります。そんなモノ同士がぶつかった時に出来るエネルギーですので、強い相手と戦えばその分だけ多くのエネルギーも発生します。我々精霊を満たすのにこれ程適したモノはありません。』

「なるほどね。あれ？でも、それなら外に出したエネルギーをもう一度吸収しなおしたらいいんじゃないの？」

『尤もな考えだ。だが、それが出来ないのだ。』

「え、どうしてさ？」

『そうですね……。主、あなたは本来の我々がどのような存在か知っておりますね？』

「まあ、知識としてだけど。それが何か関係あるの？」

『我等が本質は“虚無”。あらゆる有を貪り喰らいて無へとするもの。無からは何も得る事は出来ない。それは我等の存在そのものにも及ぶ。』

『存在、消滅……。』

『我々が存在するだけで世界はその力によって力の流れ大きく乱れ、天変地異が起こる可能性があります。それと同時に我々の存在をそのまま放置すれば我々は消滅する事でしょう。しかし、我々がすぐにいなくなっても今まで乱れていた力の流れを修正しようとする急激な修正力が発生します。』

『だからそうならない為に、おまえは自身に影響を集め、尚且つ、影響を集め終わるまで俺達の存在を維持し続けなくちゃあならない。つまり、竜太郎は影響を抑える為の人柱ってことになる。言い方は悪いがな。』

「.....」

『竜太郎様、申し訳ありません。ですが、それ以外にこの世界を安定させる方法が存在しないのです。何卒、何卒我々にお力をお貸しください。』

「よっしゃあ〜!!俺に任せんしゃい!!」

『『『『軽っ!!』』』』

「いや、だつて今さらだよ本当に、もうさんざん繋女様にツッコミしたから。はつきり言おう、俺にはシリアスなどに合わない。」

『いえ、ですがそんなに簡単に決めてしまつてよい事では無いはずですよ!?!本当によろしいのですか!?!』

「はあっーはっはっはっ!!俺は一向に構わん!!大体、こっちはもう二度目の人生はじめちゃってるんだから、約束は守らないとね。」

だから、君達全員大船に乗ったつもりでいてくれ！！タアアアイ
ツタニツク！！」

『『『沈む！！』』』』

“ あっはっはっはっ！！少し合わないうちに随分ハツチャケたね？
だが、その意気や良し！！しっかりやるんだよ！！”

「ラジャー！！サポートお願いします！！」

“ 応っ！！任せときな！！”

『く・・・、くつくつくつ、はっはっはっ、あーはっはっはっ！！
気に入ったあゝ！！久我 竜太郎。いいまあこれよりこの死竜王
がみいゝとめよおう。うわれらはあ、なんずういいいいを真の主
として認めえるう！！我らが力存分に使うがいい！！ぶうあああ
ああああ！！』

「復活して早々、他を置いてきぼりにして主に就任させるとは・・・
。死竜王っ、恐ろしい子っ・・・！！」

『死竜王！？あなた今までいなかったのに話を勝手に進めないでく
ださい！！』

『ふうん、きさまらはあ、久我 竜太郎からなあにをきいていたの
おだあゝ。久我 竜太郎のなあにをおゝ見ていたのおだあゝ。こお
のお男はあ、わあれえらを背負うといったのだあゝ。そおれをお、
笑っていいおつたのだぞお。こおれ以上わあれらあにふさわしい存
在がいるうだろおゝかあ。』

『っ!!それは……。』

『ほお〜かのもおのおどもっ、貴様らはどつどっああ?』

『……まあ、これだけ自信満々で言われたんだ、俺はこいつが主になるのを認めるぜ!!』

『主、認める……。』

『愚直で愚か。されど強き言……。この水竜王、久我 竜太郎を主と認める。』

『……ふう。皆、認めるのであるならば私も言わねばなりませんね。……人間、久我 竜太郎、我等を背負うは苦難極める道なり。それでも我等を背負うならばここに誓いを。』

「誓う。俺が全員背負ってやる。だから俺に力を……。自分の意地を貫く力をくれっ!!」

『今此処に誓いは紡がれた……。久我 竜太郎、汝を真の主として認めよう!!……よろしくお願ひしますね、主。』

「応っ!!よろしくなっ!!」

side:end

第一話：ハッピーバースデー！！オレ！！（後書き）

主人公、転生完了！！^{さくせい}

第2話・俺たちの冒険はこれからだ・・・!! って、まだ始まってすらないよー
ご指摘があったので少し、修正しました。
はるさん、ありがとうございます。

第2話：俺たちの冒険はこれからだ・・・！！って、まだ始まってすらないよー

第2話：俺たちの冒険はこれからだ・・・！！って、まだ始まってすらないよー！！

side：竜太郎

皆さん、お久しぶりです。久我 竜太郎です。

前世の記憶が覚醒してからアレコレ経って早十年・・・。

いろいろあったなあ・・・。（竜太郎は遠い目をしている。）

まあ、昔の事はまた今度話すとして、今日はデュエルアカデミアの入学試験の日だ。

数日前に筆記試験が終わり今日は実技試験が行われる。

俺は試験に遅れないように余裕をもって家を出た・・・そのはずだったんだけどなあ。

「なんでだあああああああ！！どうして、こうなった！！」

はい、現在俺は必死こいて試験会場まで走っています。

何故だ！！何故、こうなった！！誰か教えてくれえ！！

すると、俺の後ろから半透明の女の子が現れてこういった。

『電車が・・・、トラブルに・・・あった。』

「そつだね!!有難うね!!キョウちゃん!!」

『・・・うん(ニコッ)』

かわいいな畜生おおおお!!へ、この子誰だつて?巨竜王ですけど、何か?

何で擬人化してんだよ!!しかも、女の子なんて!!だつて?

俺が知りたいわ!!大体、他の竜王も擬人化できると来たもんだよ・・・。

特に驚いたの事だが、閻竜王はともかく剛竜王と巨竜王が女の子になつた事だ・・・。

で、みんなの姿だが閻竜王は浴衣姿の黒髪の綺麗なお姉様って感じである。

盲目のため目をつぶっているのがこれまた神秘的である。

剛竜王は、原作で体乗っ取られていた女の子がニット帽にジャージとシャツとジーパン姿で登場。

なかなかボーイッシュな性格である。

巨竜王はその名と反対にパーカを着たちっさい女の子だった。

ちなみに、パーカはデフォルメ化された巨竜王である。ん、キョ

トト？

水竜王は待つばいかつこのイケメンである。

だが、死竜王だけは擬人化ではなかった・・・。

見た感じ某くノ一漫画に出てくる首領兼ペットがドクロの仮面をつけてるだけみたいになっている・・・。

まあ、みんな、後は自分で想像してくれ！！イメージしろ！！その姿を！！

『まあ、た変なこと考えてるだろ、竜太郎。そんなことより、もっと急げ！！試験受けられなくなるぞ！！』

「わかってるよ！！」

そつだ、今は余計な事を考えている場合じゃない！！試験会場はもう目の前だ。

スパートダアーツシュ！！俺たちの冒険はこれから始まるんだあああああ！！

side: end

side: クロノス

「くられ！スカイスクレイパーシュート！」

「マンマミーア！我が《アンティーク・ギア・ゴーレム》がああ！！？」

なんてことナノーネ！！まさか、ドロップアウトボーイーにヤラレテしまうナノーネ！！

これデエーはワタクシのお威厳が無くなってしまふノーネ！！一体どうすればいいノーネ！！

「ちょっと待ったあゝ！！電車が事故で遅れました！！受験生の久我 竜太郎です！！」

まあーた遅刻者ナノーネ。まったく、さっきのドロップアウトボーイといい、ちゃんと時間は守ってほしいノーネ。．．．ん、いいことを思いついたノーネ！！今来た遅刻ボーイを倒せば私のメンツもつぶれないノーネ！！さっそく行動ナノーネ！！

side: end

side: 竜太郎

何とか試験時間には間に合った．．．。て、あれデュエルしてるのってまさか十代！？

おいおい、GXの時期かよ．．．。強い奴には困らなそうだけど面倒事も多そうだな。

「くらえ！スカイスクレイパーシュート！」

「マンマミーア！我が《アンティーク・ギア・ゴーレム》があ！？」

お、どうやら決着もついたみたいだし急いで遅刻した事を言わない

と。えーと、係の人はどこだ？

「それではこれで試験を終了とする。」

つて、おいしいいい！！ちょっと待ってええええ！！

「ちょっと待ったあゝ！！電車が事故で遅れました！！受験生の久我 竜太郎です！！電話も入れといたはずです！！！」

「ん、そうなのか？今確認するから待つてなさい。（プルルル、ツピ）・・・遅刻者の久我竜太郎の事ですが、はい、ええ、はい、わかりました。確認が取れた。では、君の試験を始めよう。フィールドに来なさい。」

「はい！！！」

セーフ。あつぶなつ、もう少しで試験受けなくなるところだったよ。。。高校受験してないか一年間浪浪人活送るところだったよ。まあ、なにはともあれこれで何とかなるな。

『主よ、慢心して負ければ浪人になることを忘れてはいまいか？それに落ちればあの者に何をされるか分かったものではないぞ。。。』

（うつ・・・、わかってるって。確かに、その可能性もある分、真面目にやらないとな！！）

「では、君とは私がしけん、ちょっと待つノーネ。」クロノス教諭
「？」

え、なんでクロノス先生が出てくるの？さつき十代とデュエルしたばかりじゃん！！

「君はかなりの生徒と実技試験を行って疲れもたまっているはずナノーネ。ここは私が代わるノーネ。」

「は？いや、ですが、クロノス教諭は先ほどデュエルをしたばかりではございませんか。」

そうだ、そうだ！！重大に負けたばかりなんだから無理スナって！！

「一回しかやっていないから問題ないノーネ。さあ、分かったら代わるノーネ。」

「はあ、ではお願いします。」

おいしい！！先生あんたもうちょい粘れよ！！一応は試験管なんだから！！

「それデエーワ、あなたの相手はワタクシがいたしまスウーノ。」

結局クロノス先生とかよ……。でも、まあいつか！！くつくつくつ、クロノス先生、大方俺を生贄に自身の評価を上げ直そうとしてるんだろが、逆に俺の生贄になってもらおうか……。

「分かりました！！よろしくお願いします！！自分は受験番号5番、久我 竜太郎です！！」

「ワタクシィーはデュエルアカデミア実技担当最高責任者のクロノ

ス・デ・メデイチでスウーノ。では、そろそろ始めるノーネ。」

「デュエル」

さて、手札はどんなかなあ、・・・って、これは。

「先行は私がもらうノーネ！！ドロー！！私は《天使の施し》を發動するノーネ。自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てるノーネ。そして手札《早すぎた埋葬》を發動し、ライフを800ポイント払って墓地のモンスターを特殊召喚するノーネ。カモン、《トロイホース》！！」

クロノスLP：4000 3200

《トロイホース》（AT1、600/DF1200）

「《トロイホース》は地属性モンスターを生け贄召喚するとき1体で2体分の生け贄にすることができます。私は《トロイホース》を生贄に捧げ手札から《アンティーク・ギア・ゴーレム》を召喚するノーネ！！」

《アンティーク・ギア・ゴーレム》（AT3000/DF2500）

クロノス先生が《アンティーク・ギア・ゴーレム》を召喚したら外野が騒ぎ出した。

「おお、また《アンティーク・ギア・ゴーレム》を出したぞ！！」

「あいつ、終わったな。」

「さすが、クロノス先生。」

「私はカードを1枚伏せてターンエンドするノーネ!!!」

まあ、確かに1ターン目から上級モンスターを召喚するのはすごいよな。そこを考えるとやっぱりこの先生は強いんだろうな。でも、まあ今回はスンマセンとしか言えないな。

「俺のターン、ドロー!!!俺は手札から魔法カード《物々交換》を発動。このカードは手札のカードを偶数の数だけ捨てその数割る2の枚数カードを引く。俺は手札のカードを2枚墓地に送り1枚カードをドロー!!!さらに墓地に送ったプリメルの効果を発動。このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に《プリメリトークン》(ドラゴン族・光・星1・攻/守0)2体を特殊召喚する。」

そしてフィールドには《プリメリトークン》が2体現れた。

『モフモフ。』『モフモフ。』

「『『キヤアー、カワイイ!!!』』」

プリメリはなぜか女子に大人気である。何故だろうか？

「まあ、いつか。俺はプリメラトークン2体を生贖に《死竜王 デスレックス》を通常召喚する。来い!!!死竜王!!!」

『ぶるう ああああああああああ!!!』

《死竜王 デスレックス》(AT3000/DF2500)

「おい、相手も同じ攻撃力のモンスターを召喚したぞ!!」

「あんなカード見たこと無い!!」

「まだまだ行くぜ!!さらに俺は手札から魔法カード《カオシツクゲート》を発動ライフを半分払うこ

とで2つあるうちのの、効果を一つ選んで発動する。俺が選ぶのは手札、デッキ、墓地、相手墓地からモンスターを特殊召喚する事。

デッキから《剛竜王 デスレックスアームズ》を特殊召喚する!!出番だぜ、剛竜王!!」

『ギィギァアアアアアアアアアアアアアア!!』

《剛竜王 デスレックスアームズ》(AT3000/DF2000)

「1ターンで攻撃力3000のモンスターを2体も出すナンデー!!」

「驚くのはまだ早いですよ先生。《剛竜王 デスレックスアームズ》の効果発動!!このカードがフィールドにいる時、自分フィールド上に存在する「デスレックス」と名の付くモンスターに装備させる事ができる。装備したモンスターは攻撃力が800ポイントアップし、このカードの効果を使用することができる。《死竜王 デスレックス》に《剛竜王 デスレックスアームズ》を装備!!喰え!!死竜王!!」

「モンスターがモンスターを喰ってる……。」

「嫌ああああ!!」

「おい、今度は手が喰ったモンスターの顔になったぞ!!」

《死竜王 デスⅡレックス》(AT3000/DF2500)
AT3800/DF2500)

「さらに手札からフィールド魔法《竜界》《りゆうかい》を発動!
!このカードの効果によってフィールド上のドラゴン族モンスターの攻撃力・守備力は500ポイントアップする!!」

《死竜王 デスⅡレックス》(AT3800/DF2500)
AT4300/DF2500)

「バトル!!《死竜王 デスⅡレックス》で《アンティーク・ギア・ゴーレム》を攻撃!!喰らい尽くせ、死竜王!!」

「甘いノーネ、トラップ発動《聖なるバリア・ミラーフォース》を発動するノーネ!!あなたの攻撃表示モンスターを破壊するノーネ!!」

「ところが、どっこい。竜界がフィールドにある限り《デスⅡレックス》と名の付くモンスターは、魔法・罠・モンスター効果を受け付けない。さらにこのカードは「デスⅡレックス」と名の付くモンスターがフィールドにいるかぎり破壊できない。」

「何でスイート!!!ノー!!!私の《アンティーク・ギア・ゴーレム》が食べられてるノオ〜ネ!!!」

クロノスLP:3200 1700

ソリッドビジョンで見る戦闘は迫力があってとってもリアルなんだけど、

『はあごたえがあつてなあかなかうんまあいぞお。』『このポリポリ感がたまないぜ!』』

喰っている死竜王と剛竜王のほうはそんなのんきな事を言っていたりする……。

「《死竜王 デスレックス》の効果を発動このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、2つの効果から1つを選択して発動する事ができる。俺は破壊し墓地に送ったモンスターを装備カードとして装備すし、このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップし、装備したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。」

《死竜王 デスレックス》(AT4300/DF2500) (AT5800/DF2500)

「ノオオオオオ!!」

「さらに《死竜王 デスレックス》は装備した《剛竜王 デスレックス》《アームズ》の効果を使うことが出来る。このカードも戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、2つの効果から1つを選択して発動する事ができる。俺はもう一度攻撃する事を選択する!! 《死竜王 デスレックス》でダイレクトアタック!! デスレックス《パウンド!!!》」

「また負けるナン〜テ……。ペペロンチーノオオオオオ!!」

「いよっしゃあー！ありがとうございます！！」

ふういー、まさかのワンターンキル完遂！！いくらなんでも手札が今回はよすぎたね・・・。

クロノス先生、本当にスンマセンでした！！挫けずに頑張ってくださいー！！

side：end

side：?????

「さっきの子もそうだけどクロノス先生に勝っちゃうなんてすごいね。」

「うん、でも彼の持っているカードから強力なロストロギア反応が発生してる。」

「このまま放置する訳にもいかんし、事情を説明して渡してもらおうしかないなあ。」

「ロストロギアは危険な物だからね・・・。早く回収しないと。」

「ほな、デュエルアカデミアの入学式の時にうごこか。」

「そつしゅじゅ。」

第2話：俺たちの冒険はこれからだ・・・！！って、まだ始まってすらないよー

転生者、勝利。

そして、まさかの介入者

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8660v/>

遊戯王GX ~ 界の繋ぐ竜王 ~

2011年10月9日01時40分発行